ツンツン妹は僕専用の射精管理官！

上田ながの

挿絵 しまちよ

立ち読み版

序章　僕はオナニー中毒!!　006
一章　お兄ちゃん大好き♪　017
二章　射精管理官の朝は早い　037
三章　いいわよ……あたしの膣中に……射精しなさい……。　071
四章　お兄ちゃん……大好き♥　135
五章　あたしの全部で管理してあげる♥　202
終章　これからもずっと――あたしがお兄ちゃんの射精管理官！　248

登場人物紹介

Characters

風祭未来（かざまつりみく）

遊馬の二歳年下の妹。兄のことは大好きながら、節操のないアソコには厳しく手を入れて指導していく。

風祭遊馬（かざまつりあすま）

朝勃ちのみならず、ちょっとした誘惑でフル勃起してしまう精強青年。さすがに日常生活にも支障が…。

「んちゅっ」
未来は勃起した肉棒の先端部にキスをした。
「はううううっ!!」
ビクンッとこれまで以上に激しくペニスが震える。いや、ペニスだけでなく、まるで電流でも流されたかのように、遊馬の全身は痙攣していた。
「な……なにを？　未来？　ななな……何してるんだよ!?」
「何って……もちろん……んっちゅ……おちんちんにキスしてるんだけど……。んっちゅ、むちゅうっ……。ちゅっちゅっちゅっちゅぅうう……」
事も無げに答えつつ、更に肉先に口付けをする。それも一度だけではない。ネトッとした粘液が口唇に密着するのも厭わず、二度、三度と啄むように、何度も何度も繰り返しキスをした。
口唇と亀頭が触れ合うたびに、ただでさえ大きなペニスがより膨張していくのが分かる。それがなんだか嬉しかった。
「キスって……どうしてそんなことを？　あああ……だ、駄目だってそんなことしたら……やばい、やばいから！　ぼ……僕達……兄妹……兄妹なんだよ！」
兄は慌てながら行為を止めようとしてくる。
兄妹――その言葉に一瞬ズキッと胸が痛んだ。
ただ、だからといって口付けを止めるつもりはない。

「んっちゅ……むちゅう……。はぁっはぁっはぁっ……き、兄妹だからなんだっていうのよ？　変な勘違い……くちゅっ……むちゅうう……し、しないでよね」
「か、勘違い？」
「そうよ。勘違い……。おにいさぁ、あたしがやってることをその……恋人同士がするフェラチオだと思ってるでしょ？」
「そ……それは……」
ハッキリとは答えない。けれど泳ぐ視線が未来の問いを肯定していた。
恋人同士がする行為だと遊馬が想ってくれたことは嬉しい。なんだか胸が高鳴るのを感じた。しかし、自分と遊馬は兄と妹の関係だ。いくら好きでも恋人にはなれない。悲しいけれど未来はそれを理解している。
だから――
「残念だけどそれは間違いよおにい。これはあくまでも変態おにいが漏らしちゃった汁を、射精管理官として綺麗にしてあげるだけの行為なんだから！　ティッシュを無駄にしないためにする……それだけなんだからね！　だから……変な勘違いは絶対しないでよ！　あたしを恋人だなんて思ったら……処刑！　処刑なんだからね！」
本当は勘違いして欲しいけれど、それを押し隠す。ギロッと目を鋭く細めて睨み付けながら……。
「あ、は……はい！」

お陰で兄は見事に頷いてくれた。
（本当にお兄ちゃんって押しに弱いわよね。こういうところ本当に可愛い。胸がキュンキュンしちゃう♥）
ちょっとでも油断すると表情がだらしなく緩んでしまいそうだった。
「分かれば宜しい。それじゃあ……ここからが本番……いくわよ」
それを押し隠し、いつも兄に対して向ける少し不機嫌そうな表情を浮かべながら、再び未来はチュッと肉先に口付けした。そのまま先ほどもそうしたようにチュッチュッチュッと繰り返し亀頭に口唇を密着させる。ねっとりとした肉汁で、すぐに唇はベトベトに汚れていった。
糸を引くほど粘液は濃厚である。本来ならば不快さを感じたっておかしくないほどだ。しかし、兄の身体から溢れ出たものだと思うと、この不快感すら愛おしかった。
だからこそ躊躇することなく――
「んれろっ……れろぉおお……」
未来は舌を伸ばし、勃起棒を舐めた。
「くあああ！」
途端にまたも兄の口から悲鳴が漏れる。
「な、なにを？　汚い……そこは……お、おしっこするところだから汚いって！」
「んれろっ……むちゅっ！　ちゅぷっ……れろっれろっれろぉ……。はぁはぁはぁ……べ

……別に……汚くなんかないわよ。昨日……お風呂入ってるじゃない」
円を描くように舌を蠢かせ、亀頭を舌先でなぞりつつ、兄に答えた。
「それはそうだけど……で、でもさ……」
「抗議は受け付けないわよ。第一……こうやって……んっちゅ……むちゅううっ……れろっれろっれろっ……綺麗にしないと……おにい……学校に行けないじゃない」
「いや……だけどそれは……」
「何を言っても無駄。射精管理官に対する抗議は受け付けないから！　らから……んっちゅ……れちゅろっ……れろっれろっれろぉ……」
困ったような表情を兄が向けてくるけれど気にしない。行為を中断するつもりなど、さらさらなかった。それどころか、もっと遊馬を困らせてやりたいとすら思ってしまう。
だからより舌をくねらせ、溢れ出す肉汁を舌で搦め捕っていく。濃厚な汁をまるでアイスでも食べる時のように、ペロッペロッペロッと舐め取っていった。
（これ……少し苦くて……しょっぱい……。あんまり美味しいとは言えないわね。だけど……でも、これ……お兄ちゃんの身体から溢れ出してるものなのよね？　あたしで興奮して出してるものなのよね？　なんか……そう考えると……）
先走り汁は、美味しいか美味しくないかと問われれば、間違いなく後者である。だというのに、舌を止めることができない。それどころかより激しく蠢かせてしまう。
（不味いのに……不味いはずなのに……。美味しく感じる。もっと……もっと舐め取りた

いって思っちゃう……）

青汁の不味い、もう一杯！　的な理論なのだろうか？

分からない、分からないが、行為を中断しようという考えは思い浮かびもしなかった。

それどころか、ただ舐めるだけでは飽き足らず――

「ま、まさか⁉　それは……そんなことしたら駄目だって！　僕達はきょうだ――」

「んっも……もぶっ！　んぶうっ！　もっもっもぽぉおお……」

「くひぃいいい！」

ぐじゅっ！　じゅぐるっ！　ぐじゅじゅじゅじゅぅうう……。

遂には抗議してくる遊馬の肉棒を、躊躇することなく咥え込むことまでしてしまう。

（お……大きい……。おちんちん……凄く大きくて……あたしの口……裂けちゃいそう……。だけど、でも、なんか……これ……とってもあったかくて……咥えてるだけなのに……なんか……き、気持ちいい……）

口内を巨大な熱棒が侵食してくる。今にも裂けてしまいそうなほどに、未来は口を大きく開くこととなった。

（大きすぎて……息まで詰まっちゃいそう……）

巨棒によって呼吸さえも阻害されてしまいそうになる。はっきりいって苦しい。

だというのに何故だろうか？　どうしてだろう？　苦しいのに、苦いのに、もっともっとペニスを咥えたいと思ってしまう。もっと喉奥で感じさせてあげたいと思ってしまう。

「はぶっ……びっぶ……むじゅっ！　むふうう……んっんっんんんん」
わき上がる想いのままに、ジュブジュブと喉奥まで肉棒を沈めていった。
「むっふ……。んふー。んふー。んふぅううう」
（口の中……いっぱい……。お兄ちゃんのおちんちんでいっぱい……）
ビクンッビクンッビクンッと口内でペニスが痙攣する。この震えを感じながら、未来はうっとりと目を細めた。
が、それは本当に一瞬であり、すぐに気を引き締め直すと、肉棒を咥え込んだまま未来は上目遣いで兄を睨んだ。
「お……おにい……お……おひんひん……わらひのくひのなかれ……しゅごく震えてるわよ。これ……か……感じへるわけ？」
「そ……それは……その……あ、ああ」
問いに対し、兄は素直に頷いた。
（感じてる。感じてくれてるんだお兄ちゃん。嬉しい。嬉しい！）
喜びが胸の中に広がっていく。しかし、その喜びを表に出すことはない。
「こりぇは……んっふ……ちゅぼっ……んっんっんっ……たらのしょうじなのに、しょんなんれ感じるとか……本当におにひってしゅけべよね。はちゅじょうきの獣みひゃい」
それどころか、肉棒を咥えたままいつもの調子で兄を罵る。
「そんなこと言われたって……。気持ちいいものは気持ちいいわけで……」

これに対して抗議の声を遊馬が向けてくるのだが、気にしない。
「いいわけにゃんか聞かなひ。こりぇはおひんひんを綺麗にしゅるために、やってるらけなんらからぁ。らからいい、我慢よ。我慢しにゃいとらめなんらからね！」
なんて釘を刺すような言葉さえ向けつつ――
（た、確かこうすればいいのよね？）
男子を喜ばせるためにはどうするべきか？　なんて話を以前陽子達から聞いた覚えがある。その時の知識を総動員し、未来は口唇を窄（すぼ）め、肉茎を強く挟み込んだ。それと共に口内の肉棒に舌を這わせつつ、顔をゆっくりと前後に動かす。ただ咥えるだけでなく、ジュボッジュボッと唇で肉液を擦り上げる様に……。
「んっじゅ……。むじゅるっ！　じゅっぽじゅっぽじゅっぽじゅっぽじゅっぽ」
自然と下品ささえ感じる様な音色が、室内に響き始めた。ペニスを咥え込んだ口端から、ダラダラと唾液が零（こぼ）れ、ツツッと顎まで垂れ流れる。同時に舌を蠢かせ、溢れ出す肉汁をごくごくと喉奥に流し込んでいった。
ただ喉を上下させて飲むだけではない。舌で舐（ねぶ）りつつ、時にはジュズルルッと頬を窄めて吸引行動さえ行った。
口腔粘膜と肉先粘膜を混ぜ合わせるように密着させる。
「もっぷ……んじゅっ……むじゅうっ……んっんっんっんっ」
（凄い……出てくる……。どんどん……お兄ちゃんのおちんちんから……どんどんエッチ

なお汁が溢れ出てくる……。これ……やっぱり美味しい）

与える刺激に反応する様に、分泌される先走り汁の量は止まることなく増えていく。すべてを舐め取るどころか、咥え始めの頃よりも明らかに粘液量は増えていた。

兄の肉汁が口腔に染み込んでくる。濃厚な匂いが、口の中に充満するのを感じた。噎せてしまいそうな匂い。なんだか生々しささえ感じる香り……。はっきりいって苦いし、臭い。なのにどうしてだろう？　この匂いが、味が、なんだか癖になってしまいそうだった。

「おにい……汁……らひしゅぎ。こりぇじゃあじぇんじぇんおひんひん……綺麗にできないじゃない……馬鹿ぁ……」

ただ、それでも口では兄を罵る。

とはいえ、罵りつつも決して肉棒を放しはしない。

「ぶっじゅ……んじゅっ……じゅっじゅっつ……ふじゅうううっ……。むじゅるるるぅ」

それどころかより深く肉棒を咥え、より強く肉汁を吸い立ててしまう。

「んぎゅっんぎゅっんぎゅっんぎゅっんぎゅぅううう……」

生温かな汁を、ひたすら喉奥に流し込み続けた。

（お腹の中に溜まってく……。お兄ちゃんの美味しくてあったかいお汁が溜まって……これ、あああ……なに？　どうして？　ただ、ただ飲んでる……飲んでるだけなのに……）

ただ吸引行動をしているだけでしかないというのに、ゴクゴクと肉汁を胃の中に流し込んでいると、どうしてか身体が熱くなっていく。いや、ただ熱くなるだけではない。

（なんか……これ……んっく……はふぅうう……き、気持ち……いい？　分かんない。どうしてか分かんないけど……あたし……これ……気持ちよくなってる。か……感じてる……お兄ちゃんの……お兄ちゃんのお汁飲んでるだけなのに――）

「んっふ、あふううう！　んっんっ――むふぅううう」

特に敏感部を弄っているというわけでもないのに、どうしてか口淫だけで未来の身体は性感を覚え始めてしまっていた。

（感じてる……。気のせいじゃない……。あたし……お兄ちゃんのお汁を飲んで感じちゃってる。これ……んんんん……はぁっはぁっはぁっ……き、気持ちいい。凄く……いい……。これ……あたし……知ってる。この感じ知ってる……。これって、も、もしかして……絶頂く？　絶頂くの？　ただ……ただお汁をごくごくしてるだけで……あたし……絶頂っちゃうの？）

誰かとセックスをしたという経験はない。兄以外とそんな関係になるつもりなどさらさらなかったから……。ただ、それでも未来はオナニーをしたことがあるので性感というものを知っている。

自分で自分を慰める時に感じる絶頂感に似たものを、口奉仕しているだけでしかないというのに未来は感じていた。

心も、身体も蕩けそうなほどの愉悦が広がっていく。

（凄い……気持ちいい。お兄ちゃんのおちんちんって……咥えてるだけでも……こんなに

気持ちがいいんだ……。ああ、お兄ちゃん。お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……）

快感と共に、愛おしさも膨れ上がっていく。

そんなものに後押しされるがままに、どこまでも妖艶に未来は肉棒に這わせた舌を蠢かせ、繰り返し頭を前後に振った。

「んっじゅ！　じゅぼっ！　んじゅっぽんじゅっぽんじゅっぽんじゅっぽっ！」

夢中になって肉棒を刺激し続ける。

（あああ！　来る！　来るっ！　き……気持ちいいのが来る！　これ……お……抑えられない……あたし……我慢できない。絶頂く……あたし……あ……たし……絶頂く！　もうっ！　もうっ！　もうぅうう！）

より喉奥まで肉棒を咥え込み、更に強く口唇で肉茎を挟み込む。同時に肉汁をジュルルルッと激しく吸引する。そんな愛撫の激しさに比例する様に、抑えがたいほどに絶頂感が膨れ上がってくるのを感じた。自分の意思でこれを抑え込むことなどできそうにない。

（お兄ちゃん……あたし……絶頂くよ……。お兄ちゃんのお汁を飲んで……あたし……あたしぃいいい！）

チカッチカッと視界が明滅する。肢体が蕩けてしまいそうなほどの肉悦が、身体の内側から全身に向かって押し広がってくるのを感じた。

この感覚に未来は身を預ける。逆らいはしない。兄のペニスでイけるという喜びで心を満たしながら——

「んっふ！　くふっ！　んっんっ——むふぅうううううう!!」
（あああああ！　き、気持ちいい♥　なにこれ……こんな……おちんちん……おちんちん咥えるの……こんな……こんなに気持ちいいなんてぇ♥　い……絶頂く♥　あたし……絶頂くっ！　絶頂くの！　お兄ちゃんのおちんちん……お兄ちゃんのお汁を飲んで……絶頂く！　絶頂く絶頂く絶頂く——絶頂くぅうう♥♥♥）
肉悦を爆発させた。
「むふっ♥　んっふ！　んっんっんっ……むふぅうう♥」
ペニスを咥え込んだまま、ビクッビクッと肢体を痙攣させる。
（あああ……気持ちいい。なんか……頭の中……真っ白になっちゃいそうなくらい……これ……い……いい♥　いいよ……お兄ちゃん……♥）
心も身体も蕩けてしまいそうなほどの心地よさに、未来はうっとりと目を細めていった。
「むっちゅ……ちゅぼっ……んっちゅ……ちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼぉ」
ただ、そうして達しつつも、口淫を止めようとはしない。ねっとりとした動きで、何度も何度も、肉棒を舐って舐って舐り続けた……。
「あああ……そんなにされたらやばいよ……。これ、で……射精ちゃう！　未来……僕……もう射精ちゃうよ！　やばい……やばいって！　あぁあああ！」
この愛撫に、遊馬が悲鳴を上げる。与えられる刺激が強すぎるせいか、こちらが達したことに彼は気付いていない様子だった。

噴水のような勢いで噴き上がった精液が、自分の身体と未来の身体をグショグショに汚していく。火傷してしまうのではないか？　とさえ思えるほどに、精液は火照っていた。

意識さえも飛びそうなほど心地いい。肉棒だけでなく、身体中が快感で痙攣していた。

「す……ごい……はぁはぁ……凄い量……あたしまで……」

自身の身体を汚す白濁液を見て、呆然としたように未来が呟く。見ると、妹が身に着けた体操服の胸元まで、白濁液が染み込んでいた。

「ネトネトして……熱い……はぁあああ……」

肉汁に塗れながら、熱い吐息を未来は漏らす。

その姿に、射精したばかりだというのに肉棒が更にたぎってくるのを感じた。

「まだ、まだ射精る！　まだ射精るよ！　まだ……射精すよ！」

一回の射精だけでは満足できない。もっと、もっと射精したい。更に精液を撃ち放ちたい——本能が叫び声を上げる。

「まだって……い、一日一回って約束でしょ！」

「でも……無理だよ。我慢できないんだ！　だから……今日だけ！　お願いだから！　今日だけ頼むよ！」

真っ直ぐ未来を見つめ、請い願う。どれだけ異常なことを頼んでいるのか、それを考えられるだけの余裕なんかなかった。ただ必死に、射精したいという気持ちを妹に伝える。

そのお陰だろうか……。

「わ……分かったわ……。もう一回……はぁ……はぁ……もう一回だけ許可してあげる」
未来は更なる射精を許してくれた。
「あ、ありがとう！　ありがとう未来！」
礼を言いつつ、もう一度腰を振り始めようとする。
「でも、待って！　待ちなさい！」
が、それは止められてしまった。
「待てって……何？」
「何って……その……だ、射精してもいいけど、ただし条件があるわ」
「条件？　それって？」
「簡単なことよ……今回は……こんなにたくさん射精しちゃ駄目よ」
そう言って未来は自分の身体を汚す白濁液を指で掬い取ってみせてきた。
「駄目って……ど、どうして？」
「どうしてって……そんなの少し考えれば分かることでしょ！　こ……これ以上汚れたら、誰かにバレちゃうかも知れないじゃない！　拭くものだってないのよ！」
確かにそれは未来が言う通りである。言う通りではあるが――
「でも、無理だよ。絶対射精る！　さっきよりもきっと射精る！　それくらい僕の……熱くなっちゃってるんだ。射精量を減らすなんて無理だよ！」
一回射精してしまったためだろうか？　先ほどまで以上に肉棒はたぎってしまっていた。

とてもではないが射精量を抑制することなどできそうにない。
「だったら射精しちゃ駄目！」
「それは無理だ！　無理だ……だから！　だから……」
何か方法を考えなければならない。未来を満足させる方法を……。
必死に思考する。射精したい。射精したい！　と、興奮しきった頭で考える。
結果、導き出した結論は――
「なら……ならさ……未来の……未来の膣中（なか）……未来のおま○こに射精していい？　それなら……服は汚れないよ！　誰にもバレたりはしないよ！」
はっきりいって無茶苦茶な願いである。が、それを無茶苦茶だと認識できるだけの余裕は今の遊馬には存在していなかった。

＊

「な……膣中って……おにい……そ、それ……本気？　本気で言ってるわけ？」
「本気！　もちろん本気だよ！　駄目？　駄目かな？」
「駄目かなって……そんなの……」
駄目に決まっている。
自分達は兄妹なのだ。
「いいだろ？　お願いだよ！」
けれども兄は引こうとはしない。強く頼み込んでくる。

（お兄ちゃん……正気じゃないよ……）
明らかに兄は冷静さを欠いているように見えた。
兄妹でセックスをしてはいけない――なんて常識さえも忘れてしまうほどに……。
（せ……セックス？　お兄ちゃんとセックス？）
そんな姿に、兄とセックスしている自分を想像してしまう。
途端に胸が――いや、胸だけでなく、子宮が疼いた。キュンキュンする。全身が発熱でもしているかのように、熱くなっていくのを感じた。
ジュワアアッと秘部から愛液が溢れ出す。
したい、兄としたい。エッチを、セックスをしたい――身体が、本能が求める。
（……お兄ちゃん……なんか辛そうだもんね。このまま放置したら、無差別に女子を襲いかねない気もする……。し、仕方ないわよね。そう、仕方ないのよ……）
膨れ上がる想いを抑えることはできなかった。
仕方ない……。仕方がないから……。それに、こんなチャンスでもないと、お兄ちゃんとエッチなんて多分一生できないだろう。
（今日だけ、今回だけよ……）
心の中で言い訳するように、自分自身に言い聞かせつつ――
「いいわよ……あ、あたしの……あたしの膣中に射精しなさい……」
兄の願いを受け入れる。

「ただし、今日だけ！　ぜ、ぜぜぜ、絶対……今日だけなんだからね！」
念を押すように今日だけだと繰り返しながら「ありがとう。ありがとう未来」と自分に向けて礼を述べてくる兄に見せつけるようにして、未来は先走り汁に塗れたブルマと、愛液で濡れたショーツを横にずらした。ピンク色の、まだ誰にも見せたことのない秘部が剥き出しになる。愛液に塗れた襞の一枚一枚が露わとなる。まだ誰も迎え入れたことのない処女地――だというのに、淫らなほどに蜜に塗れた肉花弁はクパアッと咲き誇っていた。兄とエッチをする。これから、大好きだった兄と――そんな想いに導かれるように、膣口がだらしなく口を開けていた。
自身の秘部をさらけ出すという行為に、頭がどうにかなってしまいそうなほどの羞恥を覚えてしまう。
「そ、それじゃあ……いくわよおにい」
ただ、恥ずかしいからといって、行為を中断するつもりはなかった。一度すると決めた以上、最後までやりぬく！
そんな想いに導かれるように、頭が変になりそうなほどの恥ずかしさを誤魔化すように、未来は自分から積極的に動く。肉茎を握りながら（確か、ここよね？）と、迷いつつも、兄と座りながら向かい合う様な体勢を取りつつ、自身の膣口にグチュッと亀頭を添えた。
「んっく！」
粘膜同士がグジュッと密着する。ただ触れただけだというのに、ビクンッと激しく身体

が震えてしまうほどの刺激を感じた。
肉襞が密着した亀頭に絡み付いていく。
「凄い……あったかい。これが……未来の……」
「そうよ。これが……んんん……あたしのよ……。そ、そういうわけだから……行くわよおにい。挿入れるわよ！」
（する。お兄ちゃんと……あたし……するんだ。エッチ……あたしするんだ……）
心の中に歓喜が広がっていくのを感じた。
そうした喜びを胸に抱きつつ――
ぐじゅっ！　じゅずぶっ！　ぶじゅううっ！
「あふっ！　んっく……あっあっあっあっ！」
腰を下ろしていく。ズブズブと蜜壺で巨棒を咥え込んでいった。
（は……挿入ってくる。お兄ちゃんの……あっあっ……お兄ちゃんのおちんちんが……あたしの……あたしの膣中に挿入ってくるぅ。凄い！　これ……大きい）
下腹部に異物感を覚える。巨棒によって膣道が容赦なく拡張されていくのを感じた。まるで巨大な杭を穿たれていく様な感じさえしてしまう。
「うっく……い、痛い……」
正直痛みも感じた。まるで身体を二つに引き裂かれていくような気がする。結合部から破瓜の血が溢れ出してもいた。

だというのにどうしてだろうか？　行為を中断しようという気にはならなかった。それどころか、もっと挿入れたい。もっと奥まで遊馬を感じたい――という想いがペニスを挿入すればするほど強くなっていく。

「おにい！　おにいっ！　おにいっ!!」

兄に対する愛おしさが胸に充ち満ちていく。繰り返し遊馬のことを呼びながら、ドジュッと膣奥に肉先が当たるほど奥にまで、ペニスを蜜壺で咥え込んだ。

「あっふ……あふぁあああ」

（満たされる。あたしの膣中……お兄ちゃんのおちんちんで満たされてく……。これ……す、凄い……。き、気持ちいい。痛いけど……あたし……気持ちいい。感じてる。初めて、初めてなのに……か……感じちゃってるぅ）

身体の中の足りなかった部分を満たされていく様な充足感を覚える。同時に、肢体が蕩けてしまうのではないか？　と思うほどの快楽も、痛みを覚えつつも感じた。

（い……いい……。これ……いい……。これが……エッチ……。大好きな人とのエッチ……こんな……ああ……こんなに気持ちがいいなんて……）

「はふぁあああああ……」

自然と愉悦混じりの吐息を漏らしてしまう。表情をトロンッと蕩かせながら……。

「ど……どう？　気持ちいい？　あたしの膣中……気持ちいい？」

快楽に身を震わせつつ問う。自分だけ気持ちよくなりたくはなかったから……。兄にも

同じように感じて欲しかったから……。

「うん。いい！　いいよ！　いい！　未来の……未来の膣中……お、おま○こが僕のに絡み付いてくる。溶ける。これ……僕のが溶けちゃいそうだ！　あああ……射精る！　射精るよ！　すぐに……すぐに射精ちゃいそうだよ！」

射精ちゃいそう――その言葉を証明する様に、膣中で肉棒が震え始める。今にも破裂しそうなくらいに、亀頭が膨れ上がっているのが膣壁越しに理解できた。

その事実が更に未来を喜ばせる。兄が自分で感じてくれているのだと思うと、それだけで達してしまいそうなほどに嬉しかった。このまま射精して欲しい。肉汁を流し込んで欲しいという感情が自然とわき上がってくる。

同時に、このまますんなりと射精して欲しくないとも思えた。折角一つになれたのだ。もっと自分とセックスして感じる――悶える遊馬を見たいと思ってしまう。

だから――

「ま……まだよ！　まだ……射精しちゃ駄目！　あたしが……射精……あっあっ……か、管理官の……あたしが許可するまで……んんんん……だ、射精しちゃ駄目なんだからぁ」

繋がりあったまま結合部に手を伸ばし、根元を押さえる。押さえつつ――

ぐっじゅっ！　じゅぶっ！　ぐっじゅぐっじゅぐうっじゅぐっじゅ……ぬじゅううう。

「んっく！　あんんっ！　んっんっんっんっ！」

射精衝動を更に煽り立てるように、膣壁できつく遊馬のペニスを締め上げつつ、自分か

ら積極的に腰を蠢かせた。
　処女を失ったばかりということも気にしない。感じる兄を見たいという一心で、肉壺全体を使ってペニスを扱く。扱く。扱くっ！
「締めつけられる！　未来のあそこが……僕のをぎゅうぎゅうに締めてくる！　きつい……きつくて……だけど……だけど柔らかくて……ドロドロになる。僕のが未来の膣中でドロドロになってく……。ああ……駄目だ。気持ちよすぎる！　我慢……できない！　射精したい！　未来の……未来の膣中に射精したいよ！」
　淫らすぎるピストンにすぐに遊馬は限界を伝えてきた。
「駄目……あっく……まだ……まだ駄目よおにい！　まだ……んっんっんっ……我慢。我慢よ！　あたしがいいって言うまで……絶対……絶対……し、射精なんか……させないんだからぁ」
「そんな……でも……無理だよ。おかしくなる。僕……おかしくなっちゃうよ！」
「そんなこと言っても駄目……。おにいみたいな……んっんっんっ……お猿さんは我慢ってものを知らないといけないの……。だから……耐えて……これくらい……んふうう！　我慢よ！　我慢しないと駄目よ！」
　まだ射精なんかさせない。
　もっと焦らすのだ。もっともっと、快楽に悶える兄の姿を見るために、焦らして焦らして、焦らし続けるのだ……。

ぐじゅっ！　ぬじゅぅ！　ずじゅ！　ずっじゅずっじゅずっじゅずっじゅずっじゅ！

「んっふ……はふぅう……あっあっあっあっあっ」

まるで兄を犯しているかのような勢いで腰を振る。振り続ける。

動きに合わせて乳房がブルンッブルンッと揺れるのも気にしない。それどころか兄に見せつけようとでもするように、自分から積極的に胸を弾ませる。

（あああ、痛い……。痛いけど……気持ちいい。あたし……初めて……初めてなのに……絶頂きそうになってる。お兄ちゃんのおちんちんで……どうしようもないくらい……気持ちよくなってる）

肉先と膣奥が当たるたび、視界が真っ白に染まりそうになるほどの性感を覚えた。身体中から力が抜けていく。脳髄まで痺れそうなほどの肉悦が全身を駆け巡っていた。破瓜の痛みさえも気持ちよさに変わっていく。

全身が汗に塗れていく。シャツが上擦り、胸の弾みに合わせて飛び散る汗が、我ながらとてもエッチに思えた。自然と身体が火照っていく。その火照りに比例する様に、性感もより大きく、強いものへと変わっていった。

少しでも気を抜けばすぐにでも達してしまうんじゃないか？　とさえ思えるほどの心地よささえ感じる。

（絶頂きたい……。お兄ちゃんと一緒に絶頂きたい。気持ちよくなりたい）

本能がより強い快楽を求め始める。射精して欲しい。熱い精液を流し込んで欲しいと悲

鳴を上げる。
「ねえ……あっあっあっ……。絶頂きたい？　おにい……あたしの膣中に射精したい？」
「ああ、絶頂きたい！　射精したい！　未来の膣中に射精したいよ！」
「そっか……妹に射精したいとか……おにいってほんと変態ね。駄目駄目ね」
「そうだよ。僕……変態だ。変態なんだ。妹に射精したくなるくらいの変態なんだよ！　だから射精させて！　未来！　お願い！」
自分が変態だということすら認め、射精を請い願ってきた。
その姿によりゾクゾクしたものを感じる。更に快感が強くなっていく。
絶頂きたい！　絶頂きたい！　絶頂きたい——本能が絶頂を求める。
「まったく……あっあっ……ほんと……おにいって……し、仕方ないやつね……。でも……んっく……い、いいわ。いいわよ！　そこまで言うなら射精していいわ。許可してあげる！　だから……さぁ、射精しなさい！」
（射精して！　お兄ちゃん！　あたしの膣中にたくさん……たくさんお兄ちゃんの精液をちょうだい！　お兄ちゃんのせーえきで、ザーメンであたしを絶頂かせて!!）
命令口調で語りつつ、心では強く射精を求める。
「未来！　未来っ！　未来ぅううっ!!」
どじゅうっ！　ずっじゅ！　どっじゅどっじゅどっじゅ——どじゅううう！
これに応えるように、遊馬自身が腰を振ってきた。未来の身体を肉棒で幾度となく突き

上げてくる。
「あああ！　激しい！　当たる！　これ……当たってる！　奥に！　あたしの奥におにいの――お兄ちゃんのおちんちんが当たってるぅう♥」
「射精す！　射精すよ未来！」
「来てっ！　来て！　お兄ちゃん――射精してぇえぇ♥」
兄の動きに合わせるように未来自身腰を振った。子宮口と肉先がキスをするほど奥までペニスを呑み込む。
刹那――
「うっく！　はぁあああっ!!」
ぶびゅばっ！　どびゅっ！　どっびゅ！　どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅ――どっびゅるるるぅ！
肉棒が爆発した。
膣中で膨れ上がった肉先が口を開く。ドクドクと激しく肉茎が痙攣し、多量の白濁液を未来の膣中に流し込んできた。
「あああ！　射精てる！　これ……で……てる！　熱いのが……熱い汁が……あたしの……あたしの膣中に射精てる！　あああ！　膣中が……おま〇こが満たされてく！　お兄ちゃんの……お兄ちゃんの精液でいっぱいになって……あたし……あたしぃいい！」
バチッバチッと視界に火花が飛び散った。ただでさえ火照っていた肉体が更に熱くなっ

ていく。
そして――
「絶頂くっ！　あああ……絶頂っく！　あたし……絶頂く♥　絶頂くぅうう♥　初めてなのに……膣中に……膣中に射精されて！　絶頂くの！　絶頂く絶頂く絶頂く――絶頂くぅううう♥♥♥」
快感が弾けた。
ドクッドクッドクッと脈動する肉棒の動きに合わせるように、肢体を痙攣させる。
キュウウッと背中を弓形に反らしながら、表情を愉悦に蕩かせる。結合部から多量の愛液を分泌させながら「はぁあああああ♥」熱い吐息を倉庫中に響かせた。
「はふぅうう……はぁっ……はぁっ……はぁあああ……」
全身を気怠さが包み込んでいく。
白い肌をピンク色に染め、身体中を汗で濡らしながら、ぐったりと未来は兄の身体に上半身を預けた。
その間もビュッビュッとペニスからは肉汁が溢れ出し続ける。子宮の中に広がっていく熱液の感覚が、なんだかとても心地よかった。
（たぷたぷ……あたしの膣中……おま○こ……お兄ちゃんのお汁でタプタプになってく……。熱い……凄く熱い……。火傷しちゃいそうなくらい……。だけど……でも……し、幸せぇ♥）

自分の女として最も大切な場所が兄のもので満たされている。その事実に堪らないほどの幸福感を覚えた。
（大好き……好き……お兄ちゃん……好きぃ♥）
愛おしさが溢れ出す。
このままキスしてしまいたいと思うほどに……。
「よかったよ……。凄く気持ちよかった……」
ようやく射精することができたことでホッとしたのか、どこか満たされたような様子で遊馬が呟く。その兄の言葉に頭がクラクラするほどの喜びを感じた。
だが、それでも――
「よ……よかったじゃないわよ……おにいの馬鹿ぁ……。だ……射精しすぎなのよ……。はぁはぁ……こんなに妹のな……かに……射精すなんて……今夜は……は、反省文を書いてもらうんだからぁ……」
憎まれ口を叩く。
どういった形であれ、兄と一つになれたことは幸せだ。
でも、自分と兄はどこまで行っても兄妹でしかない。だから、恋人にはなれない。
あくまでも、これは兄に対する射精管理の一環なのだ！
と、自分自身に言い聞かせるように……。

「替えのパンツ？　どうしてそんなのを持ってるんだ？」
「へ？　あ……そんなの……どどど……どうだっていいでしょ？　それより、これ……穿きなさいよね！　これを穿いて授業を受けること！」
「えええ……そ、それは流石に……」
「抗議は受け付けないわよ」
結局穿かされることとなってしまう。
妹の下着を穿く兄――変態にもほどがある状態だった。あまりに情けない。だと言うのに、どうしてか興奮してしまう。
未来のショーツが自分の肉棒を包み込んでいる。そう考えるだけで、射精してしまいそうなほどに昂ってしまう自分がいた。

というような状態である。
学校や通学路で未来とセックスしたくなってしまうのも、仕方がないといえば仕方がないだろう。
とはいえ、そうして寸止め状態に慣らされたお陰だろうか？
それとも、膣中射精しの快感を覚えたためだろうか？
いつしか遊馬は自分の興奮をある程度ではあるけれど、コントロールできるようになっていた。

気がつけば女子――例えば瑞樹を見ても勃起を我慢できるくらいに……。
そう、射精管理官未来による更生は、成功していたのだ。

更生行為開始から約二十日経った日の夜、遊馬はそのことを未来に告げた。
「そ……そそ、そうなんだ。ふ～ん、よ、よかったわね。うん。流石あ……あたしね！」
これに対し、未来はエッヘンと胸を張ってくる。実に偉そうに、実に堂々と……。
「ああ、未来のお陰だよ。ありがとう。本当にありがとう」
ありがとうという感謝の言葉は心の底からのものだった。
これで自分も普通の生徒達と同じように過ごすことができる。それも全部未来のお陰であることは間違いないから……。
だから、本当に嬉しかった。
「別に礼なんかいらないわよ。でも……まぁ何にせよ。我慢できるようになったってことは、もうあたしが射精管理する必要もないってことよね？」
「それは……う、うん……。そういうことになるのかな」
当然である。
更生という大義名分がなければ、妹とセックスなんてしていいことではないから……。
まぁあったとしても、本来はしちゃいけないんだろうけれど……。
つまり、今日からまた、二人の関係はただの兄妹という元の関係に戻るのである。やっ

と普通の関係に……。
本来ならば喜ばしいことだ。
けれど、何故だろうか？　なんだかズキッと胸が痛くなるのを感じた。
思わず縋るような視線を未来へと向けてしまう。
「何よ……その顔は……」
「え？　あ……別になんでもない……。なんでもないよ」
慌てて視線を逸らす。
（これでいいんだ。これが普通なんだから……）
胸の痛みを抱えつつ、そう自分に言い聞かせた……。

その後、遊馬は一人で風呂に入った。
未だ胸に残る痛みを誤魔化すように、ワッシャワッシャと身体を洗う。
（兄妹なんだ。僕と未来は兄妹。僕は兄で……未来は妹……だから……だから……）
何度も自分にそう言い聞かせながら……。
「お邪魔するわよ」
ちょうどそんなタイミングで、唐突に背後から声をかけられた。
「ふぇっ!?」
思わず振り返る。

するとそこには、ムチムチとした身体をビキニで包み込んだ未来が立っていた。
「未来？　え？　どうして？　なんで？」
「なんでって……もちろん、最後のテストをするためよ」
「さ、最後のテスト？」
一体どういうことだろうか？
などということを考えつつ、遊馬はマジマジと妹の肢体を見つめた。
我が妹ながら、相変わらず実に女らしい身体をしている。
たゆんっと揺れる乳房に、引き締まった括れ。プリッとした安産型の尻――そんな肉体に水着紐が食い込んでいる様が実に生々しかった。
スク水もエロかったけど、それに輪をかけてなんだか艶めかしい。
正直、見ているだけで興奮してしまう。ペニスが痛々しいくらいに硬く、熱く、屹立してしまうほどに……。
「ま……、まずいって……流石に一緒にお風呂なんか入ったら父さんと母さんに……」
「何言ってるのよ。二人は今日いないでしょ」
そういえばそうだ。唐突すぎる未来の登場によって忘れてしまっていたが、父も母も昨日から旅行中であり、明後日にならなければ帰ってこない。だから風呂場で二人きりでも関係がバレる心配は皆無だ。
「だいたい、まずいとか言っておきながらおにい……おちんちん勃起させすぎ。そんなだ

からテストが必要なのよ。いわゆる卒業試験ね」
「卒業試験？」
「そう、おにいが本当に我慢できるようになったのか？　それを今から試させてもらうの。いいわよね？」
未来が挑戦的な視線を向けてくる。
「あ……ああ、もちろんだ！　もちろん構わない！」
なんだかその視線に喜びのようなものさえ感じつつ、遊馬はハッキリと頷いた。
「いい返事ね。それじゃあ……始めるわよ」
そして、最後の射精管理が始まる。

ぐじゅっ！　ちゅぶるっ！　ぐっちゅぐっちゅぐっちゅ……。
「くううう！　うあっ！　くふぅうう……。はぁっはぁっはぁっ……」
バスチェアーに座った遊馬の身体に、ボディソープ塗れになった肢体を未来が密着させてくる。柔らかな巨乳を遊馬の背中に押しつけながら、淫靡なまでに肉体をくねらせ、身体で身体を洗ってきた。
しかも、ただ身体を蠢かせてくるだけではない。背中を乳房で擦りつつ腕を伸ばしてきたかと思うと、ペニスをシコシコと扱き上げてきたりもした。
ヌルヌルの泡塗れになった掌がペニスを容赦なく擦り上げてくる。グッチュグッチュと

いう淫猥な水音が響くのも厭わない。いや、それどころか、自分から積極的にその音色を奏でてくる。

肉茎を掌で擦られ、カリ首を指で刺激され、肉先秘裂をなぞられるたびに、遊馬の全身はゾクゾクとするような性感を覚えた。泡の中に肉棒がドロドロになって蕩けていく様な感覚が走る。ほんの少し指を動かされるだけで、ただでさえ痛々しいほどに張り詰めていた肉棒が、より大きく、硬く膨れ上がっていく。今にも爆発してしまうのではないか？と思うほどに亀頭はパンパンに張り詰めていった。

「んっふ……。はぁっはぁっはぁっ……おにい……これ……ちょっと大きくしすぎなんじゃないの？　おちんちんもうビクついてる。勃起をコントロールできるようになったんじゃなかったっけ？」

「そ……そうだよ。大丈夫……これくらい……まだ我慢できる……」

本当のことを言うとすぐにでも射精したい。が、必死に遊馬は耐える。これまで散々焦らし責めをされてきたためだろうか？　自然と射精衝動を抑え込もうとしてしまう。

「あたしが射精管理してあげてきた……はぁ……はぁ……せ、成果が出てるって感じね。前までのおにいだったら絶対もう無理だよ。とか言ってる場面だわ」

「だ、だろ？」

「でも……調子に乗っちゃ駄目。ほら……こんなのはどう？　これでもまだ……我慢できるなんて言えるかしら？」

当然手淫だけで終わりではない。寧ろ本番はここからだと言わんばかりに、未来は一旦背中から離れると、正面に周り、遊馬の前にしゃがみ込んできた。
「いくわよ」
上目遣いでこちらを見つめつつ呟くと――
ぐじゅっ！　ぬじゅううっ！
「くはっ！　うあっ！　こ……これはっ！　くぅううっ!!」
泡に塗れた巨乳で、ペニスを容赦なく挟み込んできた。
柔肉が肉茎を包み込む。柔らかいけれど張りのある乳房が、まるで膣に挿入した時の肉襞のように、ペニスにねっとりと絡み付いてくるのを感じた。腰が抜けそうになるほどの心地よさに、思わず声を漏らしてしまう。
「んあっ！　んっく……はぁはぁ……震えてる。おにいのおちんちん……あたしの胸の中でビクッビクッって震えてるのが分かる。これ……感じてるわけ？　まだ挟んだだけなのに、もう射精そうになってるの？」
「ま……まだだ！　まだだよ！」
マグマのように熱い衝動が下腹部から肉先に向かってわき上がろうとしているのを感じた。が、抑える。抑え込む。まだ絶頂くわけにはいかない。まだ耐えなければ……。
「ふふ……いいわ。その調子よおにい。そうでなくちゃ合格なんかあげられないんだから！ほら……もっとよ、もっと耐えておにい」

などと語りつつ、乳房で更に強くペニスを圧迫してくる。しかも、ただ圧迫してくるだけでは終わらない。

ずっちゅ……ぐちゅっ！　ぬじゅううっ……。ずっちゅずっちゅずっちゅずちゅうぅ。

「んっふ……んふうっ！　んっんっんっんっんっ」

上半身をくねらせ、肉茎を乳房で扱き始めてくる。艶やかな吐息を吐きながら、幾度も、幾度も……。

「はぁあああ！　くぁっ！　うぁあああっ！」

ほんの少し動かれただけでしかない。なのに、手で扱かれていた時よりも数倍大きな快感を肉棒は覚えてしまっていた。ペニスだけでなく、全身が震えるほどの性感を……。

しかも、未来はただ量感溢れる膨らみで肉棒を擦ってくるだけではない。乳房の動きに合わせて、時には力を込めたり、時には抜いたりもしてきた。絶妙な力の調整である。上下左右に乳房がうねる。大きく、形のいい柔肉が、醜いほどに膨れ上がったペニスを擦り上げてくる様に、なんだか頭がクラクラした。

ペニスからどうしようもないほどに射精衝動が滲み出してくるのを感じる。脳髄が蕩けてしまうのではないか？　と思うほどの心地よさだった。

「どんどんおちんちん……大きくなってる。それに……んっく……あっあっあっ……あ、あたしの……おっぱいが火傷しそうなくらい、熱くなってる。おにい……これちょっと感じすぎなんじゃないの？　精液お漏らししちゃうんじゃない？」

「そ……そんなことは……」
「嘘ついたって無駄なんだから……。ほら……おちんちんの先っぽからは、もうヌルヌルのお汁が溢れてる。あたしの乳首に絡み付いてくるわよ」
乳房だけではない。水着からはみ出して勃起した乳首をも、未来は愛撫に使用してきた。
膨れ上がった亀頭に、コリコリになった乳頭を押しつけてくる。溢れ出す先走り汁を搦め捕るように、円を描くように乳頭を蠢かせてきた。お湯ともボディソープとも違う、ネトネトの粘液に桜色の胸が濡れそぼっていく。見つめているだけで、肉茎が内圧でガチガチになっていくのを感じた。
いつ性感が爆発してしまってもおかしくない状況である。
「くふっ！　ふぐううっ！　うっうっうぅうっ！」
ただ、それでも耐える。歯を食いしばり、必死に射精衝動を抑え込んだ。
「まだ我慢するんだおにい……。こんなにおちんちんガチガチなのに……。ふふ、いい頑張りよ。褒めてあげたくなるくらいにね。だけど……でも……こういうのはどう？　これでも……これでもまだ……おにいは我慢できる？」
しかし、責めはまだ終わらない。
未来は乳房でペニスを挟み込みつつ遊馬の股下に手を差し込んできたかと思うと、優しく睾丸を指で転がすように刺激してきた。数度優しく指で揉みしだいてくる。かと思うと更に指を蠢かし、尻の方まで伸ばしてきた。そのまま指先を尻の谷間に差し込み——

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!